
人魚姫異聞

天ヶ森雀

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人魚姫異聞

【Nコード】

N3896P

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

城の裏にある浜辺で『人魚姫』を待ち続ける王子イェルト。嵐の晩の後、彼の元に現れた美しい少女は、声と記憶を失っていた。国の命運をかけた婚姻を控えながら、彼は少女の面倒を見始める。

TIINAMI掲載後、改稿投稿。

沈黙の少女

暗がりには、老婆の愉快そうな声が響く。

目深に被ったフードに漆黒のローブ、皺だらけの口元と折れ曲がった鷺鼻。水晶玉をさする小枝のようにひび割れた指には、大きな石の指輪がいくつも嵌っている。

彼女は魔女だった。

「―まったく、あんたみたいな賢い娘が私のところに来るとはねえ？」

魔女は娘の正体を知っていた。高貴な生まれである。魔女のようにいかがわしい存在の元に来るような立場ではないはずだ。しかし、客を選ぶ気はない。寧ろ舞い込んできた珍事は、彼女の退屈な生活を紛らわすには絶好のネタだった。

揶揄する口調に、それでも水晶の向こうにいた若い娘は固い口調を崩さなかった。

「どうしても…あの方に会って確かめたい事があるの」

「ほっほっほ、なかなか健気で結構。恋する娘はそうじゃないとね」
そんなんじゃ、と言いかけて、喉の奥で飲み込む。

魔女の言う事は当たっている。

娘は恋をしていた。

娘の声とは裏腹に、魔女はおかしくて仕方がないと言った風情だ。まったく、恋情ほど人を愚かな方向に突き動かす感情はないだろう。若い娘となれば尚更である。

「ただし、…解っているね？ この薬を飲めば、あんたは口が利けなくなる」

「ええ」

「そして、もしあんたの正体が誰かに―、彼の王子にばれる様な事があれば…」

「解っているわ」

魔女に最後まで言わせることなく、悲壮な覚悟を胸に秘め、娘は肯いた。

「まったくねえ、長生きはしてみるもんだ。こんな愉快な事はそうそうないよ。姫、あんたの幸運を祈ってるよ」

もちろん、幸運なんてありえない。娘の賢い頭では、分かりきった事だった。

それでも――彼女は彼に会いたかった。

老婆は懷から小瓶を差し出すと、娘に手渡した。

魔法の薬が入った小瓶を握り締めると、娘は音もなく魔女の住処を後にした。

浜辺の散歩は、イエルト王子の毎朝の日課である。

断崖絶壁に立つ古式勇壮な城から、人に知られぬ細い自然の階段を下りると、緩やかな浜辺に続く小道があった。この浜辺は王地領なので、漁師達も来ない。見晴らしがよく刺客の潜む場所もないので、一人で過ごすにはいい場所だった。

美女として名高かった母親似の王子は、どちらかと言えば女顔で繊細な印象を見る者に与えるが、実はそれなりに腕も立つ。

浜辺の散歩も、足腰の鍛錬と言う建前に基づいていた。

もちろん言い訳である。

世継ぎの王子としての多忙な日々や、様々なストレスをクリアしリセットするには、一人になる時間が必要だった。

そして、遠い思い出に想いを馳せる事も。

彼は人魚の夢を見る。

その昔、この国の王子を助けて去っていった人魚が、戻ってくる日を夢見ている。

御伽噺だと、痛いほど認識していながら、心の奥底だけでそんな夢を見るのを自分に許していた。

なぜなら、その夢にタイムリミットがあることも分かっていたからだ。

夢が終わる日は近付いている。悲しくはないし、辛くもなかった。浜辺をゆっくり歩きながら、穏やかな水平線に視線を投げる。昨夜の嵐が嘘の様に海は凪いでいた。いつもなら、その海に異変がないことに、軽い失望を覚えるところだ。

しかし、その朝はいつもと違っていた。

まぶしい朝日が反射する浜辺に目を凝らすと、見慣れぬものが打ち上げられている。

初めは魚かと思ったが、それにしては大きかった。

海からの漂着物は珍しくはない。特に嵐の後は色んなものが流れ着く。

だから、近付いたのは単純に好奇心だった。

そして、その固まりが波打つ金の髪と一糸纏わぬ白い裸身だと認識できたのは、その直後の事だった。

（エリン）

王子は心の中で、彼の人魚の名前を呼んでいた。

「イエルト！ イエルトはおらぬか！――！」

尖塔が並び立つ堅牢な城いっばいに、王の怒鳴り声が響き渡っていた。

同時に石床を叩く激しい靴音も響く。後ろからおろおろと侍従も小走りですわいてきていた。しかし、王を止めるには及ばない。

「裸体の娘を連れ込んだと言うのはまことかあ！――！」

怒声を上げながら、王子の私室に踏み込む。

部屋の主は、柳に風と言った風情でにつこり父親を迎え入れた。

「これはこれは、父上。ご機嫌麗しゅう」

「麗しゅうないわ！ 聞いたぞ！ 若い娘を城に連れ込んだと言うのはまことか！！」

「人聞きの悪い。浜辺で気を失っていたから、介抱する為に連れてきただけです」

「む！ 本当か！？」

「それともなんですか？ 傷つき倒れていたものを見過ごせと？」

「む！ いや、それは……！」

「大体、父上のように大声で触れ回る方が、よほど外聞に悪いと存じます」

「いや、しかし！」

反駁しようとする父王の声を遮るタイミングで、奥の寝室から恰幅の良い侍医が顔を覗かせた。

「殿下、娘が目覚めました」

「あ、そう。今行くよ」

「おい！ イエルト！ 話はまだ……」

王を無視してイエルトは視線で侍医に先を促す。恐れながらも、医者は今診た患者の様子を告げた。

「しかし、彼女、どうも口と記憶が……」

侍医の潜めた言葉にイエルトは形のいい眉を顰める。

「……分かった。ご苦労でした」

王子は思慮深く目を細めると、首を振って侍医を退室させた。

「おい！ イエルト！」

「だから大声は控えてください。病人に響きます」

あっさり無視され続け、尚且つ問答無用で押し返されて、王は顔色を失う。しかし、王子の方が一枚上手だった。

「お話はまた後で。彼女を見舞ってきます。身元を確かめねばなりません」

「お前がやる必要はないだろう」

「私が拾ったんです。責任上、ちゃんと私が面倒を見ます」

「しかし！」

「解った事はすべて報告いたします。では、父上、後ほど」
王の目の前で寢室の扉が閉ざされる。

「む〜〜〜〜！！！」

腹立たしい事に、王子の言い分はいちいちもつともだった。しかもこの王子は、言い出したら決して聞かないのだ。優しげな顔をして、実は相当頑固者だった。血は争えないと言う事だ。

無理を通そうとすれば拗れるのは必至だろう。

とりあえず、現状は把握した。あとは報告を待つしかあるまい。

そこまで思考すると、王は悔し紛れに舌打ちを打ちながら、踵を返して王子の部屋を退室する。従者が慌てて後を追いかけていった。

海に面した寢室のバルコニーは窓が開け放たれており、寝台を覆う天蓋のレースを揺らしていた。

大人が5人は寝れそうな広いベッドの真ん中で、少女はいくつもの枕を背に、寝間着姿の半身を起こして身体を預けていた。

美しい少女だ。長い豊かな金髪。きめ細かい透き通るような肌。

白い首は水鳥の様に細く、手足も細い。けれど、娘らしい丸みも充分にある。抱き上げて運ぶ時は裸体を慮り、騎士道として自分の上着をかけたが、それでも布の下のしなやかな皮膚が形作るものは感じられた。

まっすぐ通った鼻梁とふつくらとした唇が、上品さを醸し出していた。

金の睫毛に縁取られた、大きなマリンプルーの瞳が、不安げに揺れている。

「大丈夫？ どこも痛くない？」

イエルトは優しい表情で問いかける。

少女は声もなく肯いた。

「そう、良かった」

王子の柔らかな笑顔に、少女の頬がほんのり赤く染まる。

「何故あそこに倒れていたか、覚えているかい？」

彼の問いに、少女は悲しげに首を横に振った。

「じゃあ、自分が誰かは分かる？」

どこまでも優しい声に、少女は必死に考え込んだが、やはり答えは出ない。

「いいよ、無理しなくて。少しゆっくりしたら思い出すかもしれないね。それまでここにいればいい」

「……………」

萎縮するような見上げる瞳は、いいのか、と問っているのだろう。

「大丈夫。ちゃんと僕が守ってあげるから」

腰を落とし、目線の高さを合わせて約束を口にする王子に、まずまず少女の頬は赤くなる。

「そうだね、でもとりあえず、呼び名は決めた方がいいかな。名前がないと不便だし……」

王子はそう言いながら、窓の外に眼をやった。潮風が波の音を運んでくる。

「僕が適当に決めて構わないかい？」

少女は眩しそうに彼を見つめると、こつくりと肯いた。

「そうだね、じゃあ……エリンって言うのはどうかな」

少女は不思議な瞳で逡巡すると、再度肯く。

「じゃあ、エリン、よろしくね」

差し出された王子の手をそっととると、少女は初めて零れる様な笑みを浮かべて彼の手を握り締めた。

波打ち際

「あそこが、君を見つけた場所だよ、エリン」

イエルト王子は浜辺の先、流木が溜まっている一角を指差した。まだ夏の名残があるとは言え、朝の浜辺は潮風で肌寒い。

エリンは侍女の手に寄って長い金髪を結い上げられ、髪の色に合わせて琥珀色のドレスを着せられていた。焦茶地に金糸の抜いとりのある帯で締められたウエストは、大男ならば両手で掴めそうなほど細い。

（彼女も…これくらいだったかな？）

横目でちらりと覗き、つい、以前一度だけ会った少女と比べてしまうのは、男としての性だろうか。

浜辺を歩く彼女の足は歩き慣れぬかの様に覚束ず、それでも何とか一人で歩こうとしていたが、三度躓きかけた後に諦めてイエルトの腕にすがりついた。

イエルトの肩に届くか届かぬかの背もあの少女と同じくらいだ。

岩場の階段を降りる時だけは、さすがに勾配が急で危なかったのに縦抱きに抱き上げたのだが、彼のちょうど頭に当たるふくよかな胸のあたりから早足の鼓動が感じられて戸惑う。首に軽く巻き付けた腕も微かに震えている。彼女の緊張感が伝染りそうになって、手に力が入りそうになるのを堪えた。

見た目どおり華奢で軽い身体だ。

目が合って微笑みかける度に頬を染めて俯いている。

咲きかけのバラの蕾の様に可憐だった。

「どう？ 何か思い出せそうかい？」

指差す先に視線を送ったが、エリンは眉根を寄せて考え込んだまま、ゆっくり首を横にふる。

「そう…」

相槌を打ちながら考え込む。

一応近隣の村にも調べの手を入れたが、彼女の傷ひとつない手や侍女に世話される事に慣れた様子を見れば、労働階級の生まれでない事は一目瞭然だった。ある程度富裕の商人や貴族となると、探すのは難しくなってくる。そもそも良家の子女が行方不明ならば、とつくに耳に入っているだろう。あとは訳ありの娘の筋。地位あるものの隠し子や、売られた没落貴族の娘と言ったような。そうになると彼女の存在自体を隠している場合もあるので、おいそれとは見つけない。

イエルトの言葉に肯いたり否定の意を表したりするあたり、耳は聴こえている筈だが、それでも長文になると、言葉を読み取るうとじつと彼の顔を伺う節がある。この辺りでは珍しい金の髪は、異国のものと思えなくもない。しかし、例えば異国奴隷なら、違法ではあるが持ち主の焼印を入れるのが普通である。イエルトに向ける無邪気で純真な表情を見る限り、奴隷として逃げてきたとも考えにくかった。

沈黙を考するイエルトの様子に不安を覚えたのか、エリンがそつと彼の袖口を掴む。

「ああ、ごめん。大丈夫だよ。きっと君の家を見つけてあげるから」子供をあやすように、その頭をそつと撫でた。

エリンは何故か、少し悲しげな瞳を見せて、イエルトの言葉にそつと肯いた。

それ以来、イエルトの日課だった朝の散歩には、彼女が必ず同行するようになった。

毎朝食事の前に顔を出すと、イエルトの手を取り、必ず海の方を指差すのだ。

「いいよ、行こうか」とイエルトが答えると、ぱつと顔を輝かせて

笑う。

生まれたばかりの雛が初めて観たものを親だと思い込むかのように、彼女はイエルトが許す限り後を付いて歩いた。

「彼女の倒れていた海を見る」と言う事が事の解決に繋がるとは、いまひとつ言い難い。そもそも彼女が本当に記憶を失っているのか、もしくは帰りたい場所があるかも謎である。

しかし彼女といえるのは単純に楽しかった。

口が利けない分、表情や仕草で感情を丁寧に読み取る。彼女もイエルトが話す時は、一生懸命彼が発する全てを見ようとしていた。外見からすると、せいぜい成人したばかりのイエルトより2、3歳下と言ったところだろうが、表情はそれより更にあどけない。

混じりけのない単純で純粋なやり取りは、普段、修辞や建前にまみれた王子と言う立場にあつて、新鮮で心地いいものだったのだ。

「この海にはね、人魚の伝説があるんだ」

語るともなく王子は淡々と語りだす。

「昔々、ある王子が海で溺れかけた。誕生日の夜に客船で祝宴を開いていたら、急に嵐が来たんだ。王子は荒れ狂う海に投げ出され、船の甲板だった板に必死にしがみついて数刻助けを待ったが、とうとう力尽きて沈みそうになった」

遠く、水平線を眺めながら、イエルトは遠い過去を瞳の中に再現しようとする。

エリンはただじっと、王子の声に耳を傾けた。

「その時、一人の美しい人魚が現れて、王子を救ってくれました。おしまい」

唐突な終わり方にエリンはぽかんと首をかしげる。

「おとぎ噺だよ。人魚は海へ帰って二度と現れなかったっていう、それだけの。ただの他愛ないおとぎ噺」

悪戯っぽくイエルトが笑う。

エリンはどこか不満げな顔をしてイエルトの顔を覗き込んだ。

彼の言葉には、おとぎ噺を語る以上の何かが宿っている。例えるなら深い情愛の様な。エリンは敏感にそれを感じ取っていた。

「ああ、エリンには敵わないな」

彼女の雄弁な瞳は、言葉よりも激しく真実を求めている。

イエルトは苦笑しながら、ぼつぼつと言葉をつないだ。

「うん、本当はね、人魚はいたんだと思う。…そして僕は待っていたんだ。ここでもう一度彼女に会えるのを。だから…君がああ浜辺で倒れているを見た時、彼女が戻ってきたのかと思った」

潮風に目を閉じて、ゆっくりと息を吐いた。

「そんな筈なのにね。…こんな事、皆には内緒だよ？ 『一国の王子が何てバカな事を』って、父上あたりカンカンだ」

振り返り、冗談めかして笑って見せるが、その笑みが不意に固まった。彼女もイエルトの言葉に口元が綻んでいる。それなのに――

「…エリン？」

手を伸ばして白い頬に触れる。

「どうして泣いてるんだ？」

問われて初めて気付いた様に、彼女は自分の指で濡れた頬の跡を辿った。

どうして自分は泣いているんだろう？

何かを吐き出そうとしても声は出ず、唇を噛んで、もどかしげに首を横に振る。

「何で泣いてるのか、分からないの？」

彼の的を射た言葉に反応して、見上げた瞳が迷子の子供のようにいとけなく透きとおる。溢れる涙で、海を映したような瞳が見える。滲んで溺れた。混乱する感情の波をうまく制御できず、ただ涙と言う形で吐き出す事しか出来ない様に、次々涙は溢れてくる。

（ワタシヲミナイデー）

そんなつもりで彼から遠ざかろうとした身体は、腕を引かれて抱きしめられていた。

突然の抱擁にエリンの身体は一瞬強張ったが、抗う事ができずされるがままになってしまう。

「ごめん、変な話をして」

首の斜め後ろのほうから、くぐもった声が聞こえる。

なぜ彼が謝るのか、エリンには分からない。けれど彼の胸は大きく、その腕は暖かった。

胸の奥が痛む理由はわかっている。自分はその為にここに来たのだから。

決して告げることの出来ない秘密を胸に抱いて、今この刹那だけの幸福をエリンは噛み締める。

どうしても身体が震えてしまうのは…たぶん、朝の空気が冷たいからに違いない。

「もう戻らないと…」

どれだけの間そうしていたのか、王子の抱きしめる手に力が抜けていくのを感じて、思わずエリンは彼を見上げる。

普段はかき上げている彼の前髪が、風に靡られて乱れ落ちていた。その砂色の髪に魅入られたように指を伸ばす。

彼の額に触れるかどうかの距離で指が止まった。

イエルトが、じつとエリンを見つめていた。

そのまま、彼女の指に先を促すように長い睫毛を伏せて目を閉じる。白い指先が、恐る恐る白皙の肌に触れた。

まっすぐな額を滑り落ち、まぶたを経て頬に落ちる。

イエルトは微動だにしないまま、彼女の指先を感じていた。

やがて顎の先でその指が離れると、彼はゆっくりと目を開く。

エリンの大きな瞳が、何かを恐れるように、けれど逸らされることなく彼を見つめていた。

その時不意にこみ上げた衝動に、どんな名がつくのかはわからない

い。しかし考えるより先に体は動いてしまう。

彼の手のひらがそつとエリンの頬を包み込むと、その額にそつと口付けた。

イエルトの唇の下で、彼女がかすかに震えるのがわかる。

その震えに誘われるように、彼の唇は閉じられたまぶたへ、柔かい頬へと落ちていく。

やがて、ふつくらとした唇にたどり着こうとするその直前、彼は意識を取り戻した。

（ダメだ、今はまだ）

彼の微妙な変化を肌で感じ取り、エリンはそつと目蓋を開く。

いつもの優しい笑みを浮かべたイエルトが、エリンを見つめていた。

「もう、帰ろう」

彼の囁く様な言葉に、エリンはなす術もなく小さく肯くしかできなかった。

「大体お前は今の状況が分かっているのか！？」

相変わらずの父王の大音声に、自室の椅子に長い足を組んで座りながら、就寝前だったイエルトは顔を思い切りしかめた。

そろそろ雷の落ちる頃だと予想はしていたが、解っていたからと言つてうんざりする事にはかわりない。これだけよく響く声の持ち主なら、いっそオペラ歌手にでもなれば良かったのに、と心の中で悪態を付く。

とは言えエリンを拾ってから数週間、短気な王にしてはよく保つた方だろう。

父は決して暗愚の王ではない。むしろ歴代の王に比べれば、名君の一人と言つても良いだろう。軍備を強化し、民の識字率を上げ、

産業を奨励して国力を豊かにした。半ば強引だとの批判もないではないが、精力的且つの射た執政能力は、内外を問わず評価が高い。当然ながら、その世継ぎであるイエルトに対しても、民の期待と要求は大きかった。

それ自体は決して苦痛ではない。しかし――

「婚礼を控えている事は重々承知していますよ」

天気の話でもする様に淡々と答えた。

「ならばもう少し軽率な振る舞いは避けて然るべきだろう！ 供もつけずに若い娘をつれてふらふらと！」

「ふらふらとなんてしてません。歩くのは人目につかない裏の浜辺だけだし、彼女の世話も口の堅い侍女と侍従を厳選してあります」

「当たり前だ！ こんな事が先方の耳に入ってみる、あつという間に破談だわ！ 遊ぶなどとは言わんが、タイミングを考える！」

「考えてますよ。今だからあのこが必要なんです」

どこまでも敢然としたイエルトの態度に、王のこめかみがピクピク震え始める。大体、昔から何を考えているのかよく分からない息子だった。腹芸は王家のたしなみとはいえ、父親としては苛立たしい事この上ない。

「お前が……今回の縁談を嫌がってるとは聞いておらんがな」

意外な事を聞かれて、イエルトは目を瞠った。なぜそいう話になるのだろう。

そもそも今回の婚姻に関して、意向を聞かれた覚えはないが、拒否する権利がない事も知っている。

「嫌がつてなんかいません。隣国のアデリエル姫は、才女と名高くおまけに美姫でもある。政略結婚にしては望むべくもない良縁ですよ」

実際一度だけ婚約式で顔を合わせた際、美しくも聡明な姫である事は、二言三言交わしただけでも充分に分かった。

肩先で切りそろえた真っ直ぐな黒髪と、勝気な印象を与える口元。

微妙に発音の異なるイエルトの母国語で流暢に口上を述べたのは、それなりに一生懸命練習したのだろう。努力家でもあると言う事だ。正直、かなり好感を抱いてた。

「ならば、なぜ訳の分からぬ行動ばかりとるのだ。そもそもあの娘の正体は分かったのか!？」

「いえ。まだです」

睨み付ける王の視線を、ひらりと交わして窓の外に眼をやる。夜の海は黒いビロウドの様にうねっていたが、水平線だけが星や月を映してきらめいている。

あの日、このバルコニーで、あの姫は海を初めて見たと言って、微かに頬を紅潮させていた。

その表情だけが、落ち着いた少女を年相応の若さに見せて愛らしさが混じる。

イエルトにとっては毎日そこにあるのが当たり前前の風景だったのだ、驚いた自分に苦笑を浮かべた。なるほど、山と森に囲まれた隣国には海がない。見た事がないのは当たり前だ。

隣国と言っても、かの国と隣接する国境はかなり高い山脈で、親密な国交が始まったのはつい最近の事である。お互いその存在を知っている、特にその山脈を越えてまで行き来する利益もなく、時折り時候の挨拶の手紙を交わす程度のもだった。

しかし、近年その山脈に鉱脈が発見され、所有権を巡って両国間に緊張が走った。

一寸の手違いでも戦争が勃発しかねない緊張を孕んだ中、回避のために持ち上がったのが今回の政略結婚である。幸いにも年齢も釣り合いが取れている。今までに例を見ないほどの親書を携えた早馬が行き来した結果、この策はもう手を挙げて両国に支持された。もちろん、鉱脈の細かい所有取り決めに忍ばせての婚姻だ。

「…御安心ください、父上。私とて王族に生まれた者としての使命は心得ております。今回の縁談を台無しにしたりは決してしません」
力強い口調で言い切る王子の言葉に、それでも王は疑わしげな目

を向けた。

「お前が決して愚かではない事は知っておる。しかしあの娘はいかん。さつさと片をつける。良いな！」

最後通牒を突きつけた王の目は本気だった。イエルトが何もしないのなら、自分が手を下すつもりだと言外に語っている。

（まあ、父上としては当然そうくるよな）

ふと、戸口に人の気配を感じて、次の間に通じる扉をそっと開く。イエルトの私室は奥の間に当たり、次の間は人払いしてあって、誰もいない筈だった。

「おい！ 聞いているのか！？」

而して次の間に人影はない。甘い花の香りが漂うだけだ。

「聞いてますよ。大丈夫、もう少しであの娘は然るべき場所に帰します」

扉を閉じて、王を振り返る。

「その言葉、努々（ゆめゆめ）忘れるでないぞ。…いい加減、過去の事は忘れる」

「…御意」

につこり笑うイエルトの顔をねめつけ、王は大腿に退室する。

一人になって、イエルトは軽く嘆息した。

次の間に花は生けていない。

今朝方、エリンの髪に挿した花の香りだと気づき、イエルトは自虐的な笑みを浮かべる。

（過去は忘れる、か…。僕達にはもうあまり時間がないね。どうしようか、エリン―？）

去来する様々な思いを胸に、イエルトは再び椅子に深く腰掛けると、夜の海をずっと眺め続けていた。

夜の彷徨

身体が沈みこむ様な、ひとりがけの肘掛椅子に深く腰かけて、凧
いだ夜の海を見つめる。

ランプの灯は全て落としてあるので、部屋の中を照らすのは、丸
い月明かりだけだ。

長い足を無造作に組み、サイドテーブルに置かれたマラカ酒を煽
った。

荒海に出る漁師達が凍えるような船上で飲むこの酒は、慣れない
者なら吐き出すほど強い。もっとも幼い頃からこっさり船に潜り込
んでいたイエルトは、船長に怒鳴られながらもいつの間にか船員達
に可愛がられ、その酒を軽く飲み干す程鍛えられていた。

そもそも王族が下戸では話にならない。外交も仕事の内である。
マラカの実の強烈な苦味が喉を焼き、胃の腑に落ちていく。

サイドテーブルには、もうひとつ、薄く折り畳まれた紙片も置い
てあった。

侍医がエリンを診た後、最後に躊躇いながら言った言葉が耳の奥
に蘇る。

『あの少女には、もしかしたら…何らかの魔法がかかっているかも
しれません。仮にそうだとしたら、私には管轄外ですが』

この世界に『魔女』は存在する。市井における辻占や薬師から始
まって、人にはない能力を持つ者、人目を避けて錬金術に勤しむ者
など様々だ。基本的に、表立って世間を騒がせたり人に害をなそう
としない限り、為政者としては不干渉が暗黙の了解となっている。

（魔法ねえ…）

イエルトは胸の中で独りごちた。

今の時期、国にとって一番不穏なのはやはり王子の結婚だが、エ

リンが何らかの企みや、例えばイエルトの暗殺を謀って現れたとは考えにくい。もしそうだとしたら、今までいくらかでも機会はあった筈だ。

実際、今回の政略結婚を望まぬ者がいないわけではない。鉾山の所有権を独り占めせんと、水面下で蠢くものは多々あった。父の心配も、あながち杞憂とは言いきれまい。

けれど、エリンから政治的なキナ臭さは感じられなかった。

もちろん、うまく演技している可能性もあるだろう。しかし、彼女は刺客にはあまりに一途で不安定過ぎる。

巫女の血をひく家系の母親を持つイエルトには、相手の本質を見抜く生まれつきの素養があった。決して己を過信する事はないが、その勘は大抵外れない。

イエルトを見上げる、淡い碧の瞳。物言わぬ桜貝の唇。抱き締めた細い肩。すがり付く白い指先。

彼女が全身で語る想いに、気付かぬ訳がない。海を無心に見つめるいたいけな頬や、パツと溢れる無邪気な笑みに、何も感じなかったと言えは嘘になる。

更に琥珀の酒を煽りながら、額に手の甲をあてて目を閉じた。折りたたまれた紙片の中身はもう分っている。彼の推論を裏付ける情報が、放った密偵より届いていた。

魔女はいても、人魚はいない。賢明なイエルトは、当然その事も知っている。

（エリン、人魚はいないんだ。海に還って二度と戻らない）

最後通牒はイエルトが差し出すべきだろう。

我知らず、自嘲の笑みがこぼれた。

（参ったな。本気になるつもりなんてなかったのに――）

秋も深まり、浜辺にどこから落ち葉が散り始める。

その陰から虹色の貝殻を見つけて、エリンははしゃいでいた。彼女は本当に海が好きで、海原の前に立つ度に頬を上気させるのだ。

朝陽に透かして薄い貝殻に目を細める。

「エリン」

イエルトの優しい声がその動きを遮った。

あどけない顔でエリンは振り返り、イエルトのそばに来てにこにこ笑った。

「もうすぐ冬が来る」

彼女の外套の襟を合せながら、抑えた声でイエルトは囁く。

「その前に」、山道が雪で閉ざされる前に、僕のところには花嫁がやってくるんだ」

彼女の手のひらから、砂の上に音も立てず貝殻が落ちた。

「以前から決まっていた事でね、とても美しい姫君だよ。君もきつと気に入る」

淡々と語るイエルトの言葉に、エリンの体は凍りつく。ずっと聞こえていた筈の波の音がなぜか遠くなり、彼女の耳に聞こえなくなった。

海の青を映したような瞳が、大きく揺れて王子の顔を見つめている。

（ソノヒトヲ、アイシテイルノ…？）

言葉よりも雄弁な想いを聞いた気がして、イエルトは囁く様な声になった。

「たぶん、かけがえのない人になると思う」

その瞬間こみ上げた激しい感情に、考えるより先に体が動いていた。彼の外套の胸元をつかみ、何度も大きく頭を横に振る。

「エリン！？」

（チガウ、チガウ、チガウ……！！）

「落ち着いて、エリン！」

暴れる勢いで彼の頬を包み込んで引き寄せ、無理やり唇を押し付

けた。

唇に伝わる柔かい感触に、おぼれそうになるのを、イエルトは必死で抑え込む。

嵐に -

巻き込まれる。

息をすることさえ苦しくなってしまう。

抗わなくては。

溺れてしまうわけにはいかない。

彼女は違う。イエルトの人魚姫ではない。――人魚姫になってしまう訳にはいかない。

「 - だめだよ、そんな事をしちゃ」

必死にしがみつく小さな手を、そっと引きはがした。

溺れそうになっているのは彼女も同じだった。海から、水の中から引き揚げなくてはいけなかった。

「不安になるのはわかる。でも安心して。記憶が戻らなかったとしても…君の正体は何だろうと、君の事は僕が守るから」

あくまで優しく諭す口調だった。

「そんな顔をしなくても、大丈夫だよ。君は僕の大切な妹のようなものだ。きっと彼女も大切にしてくれる。だから…エリンも祝福してくれるだろう？」

どこまでも穏やかな、けれど有無を言わせぬイエルトの言葉に、エリンの心の奥は闇に閉ざされていく。

ダメなの？

どうしても、あなたは -

どこまでも冷静なイエルトの姿に、必死に気持ちを立て直した。

一歩後ろに引いてゆっくりと屈みこむと、足元に落ちた虹色の貝を拾い直す。砂を払って、イエルトの手の上に差し出した。

「くれるのかい？」

震える唇で必死に笑みを作ると、エリンはこくと頷く。

「ありがとう。きっと彼女にあげたら喜んでくれる」

微笑む彼に、もう一度笑ったつもりだった。けれど、いつの間にか血の気が引いて、足に力が入らない。よろめいたエリンを支えて、イエルトはそのまま抱き抱えた。

「寒いのかい？ 風邪をひくといけないから、もう帰ろう」

心配そうな彼の声にくくりと首をふる。彼の顔を見る事が出来なくて、城に帰るまでずっと胸に顔をうずめていた。他にどうすればいいのかわからなかった。

分ったのはひとつだけ。

もう、ここにいる事はできないのだ。

その夜は珍しく政務もなく、王子は早めに床に就いた。

わざとバルコニーを開けておいたのは、風が入りやすくする為だ。秋の風はまだまだ心地よい。人の気配を感じたくないからと、立哨の衛兵も酒をやって下がらせた。王子の気紛れに慣れている近衛の青年は、心得たように立ち去った。

半ば開け放たれた窓から、波の音だけが子守唄の様に聞こえてくる。

月は細い新月で、秋の星座の方がキラキラと瞬いていた。

やがて、バルコニーの扉がわずかに開き、細い影が寝室に入りこむ。

長い金の髪は、邪魔にならぬよう丁寧に編み込んであった。

片手には細身の短刀が光っている。

いつもの無邪気な少女とは思えぬほど、冷たく凍った顔のエリンが立っていた。

そつと寝台の天蓋をめくり、するりと寝台に潜り込む。

部屋の主は穏やかな寝息を立てて、窓際寄りに横になっていた。起こさぬ様、その頬にそつと触れる。

息を殺し、しばらくその気品溢れる顔を眺めていたが、こみ上げる何かに押され音もなく口づけた。

（ごめんなさい、ごめんなさい、ごめんなさい―）

彼が悪いわけではないと分っている。

自分が愚かなだけなのだ。

望むべきでないものを望み、多くを振り切ってここまで来た。

生国で心配そうな顔をした皆の顔が、遠くいくつも浮かぶ。幼い頃の無邪気な彼女を知り、愛してくれたひとたち。彼らがこの事を知ったらどんなに嘆くだろう。

それでも -

ただ彼に会いたかった。

会って、確かめたかった。

彼の望み、彼の想い、彼がいとおしむ全てを知り、その対象に自分になりたかった。

そして、仮の姿でありながら、彼と過ごした時間の甘さに、胸が痛くて堪らなくなる。

愛されていると錯覚する程に、彼は優しかった。

それは彼女が望む形ではなかったけれど。

――妹に、なれば良かったのだろうか。無邪気に、彼の幸せの望むだけの存在になれば…

しかし、もう時間がない。できる筈もない。

彼の花嫁と並び立つ事は、エリンには許されていなかった。

このまま姿を消せばよいのかもしれない。

元々彼にとってはどの馬の骨ともわからぬ娘だったのだ。東の間の妹の様な存在など、いずれ遠からず忘れるだろう。

だけど -

心に潜む暗闇が、彼女の中で殺意となって膨れ上がる。

（決して自分のものにならないのなら…、ずっと、他の人を愛する姿をみるくらいなら…）

胸が引き千切れるように痛かった。

（せめて、もう少し違う形で出会えたら…）

有り得ぬ可能性に、自虐の笑みが零れ落ちる。この嵐のような恋が、信じられぬほど彼女を変えてしまった。もう、後戻りはできない。

（さようなら。イエルト王子…）

短刀の柄を逆刃に持ち、両手で握り込んで頭上に持ち上げると、心臓めがけて振り下ろす。

思わず目を瞑ってしまったのがいけなかったのかもしれない。振り下ろされた手は、眠っていた筈の彼の大きな手に寄って、その動きを遮られていた。

短刀を握る両の手首を片手で掴み、思いのほか強靱な力で彼女の動きを封じながら、彼は寝台の上に身を起こす。

醒めた目、押し殺した声が、彼女の存在を静かに暴きだした。

「そんなに…望まぬ結婚でしたか？ — アデリエル姫」

彼が発した言葉より数秒の差を置いて、彼女にかけられた魔法が激しい明滅とともに解錠される。

そこにいたのは、エリンと全く違う姿の少女だった。

「本当に？ 本当に人魚はいるの？」

幼い瞳が彼を見上げ、無邪気に問いかける。

「…ああ。確かに彼女はいたよ。厳密に人魚というのは違うかもしれないが…海神信仰というのがあってね、海に深く深く潜る事が祈りに通じると信じられていたんだ。彼女は誰よりも深く潜れる巫女だった。つまりそれは即ち誰よりも信仰に厚かったと言う事だ」

そこで彼は遠い水平線を見つめる。彼女の愛した海はもっと紺碧に近い色だった。

船から海に投げ出された彼は、潮の流れに乗ってかなり南の海に運ばれたのだ。

「彼女のその力によって、海に投げ出された私の一命は取り留められた。同時に - 私たちは恋に落ちたんだ…」

「おたがいを大好きになったっていう事？」

「そうだな」

叶わぬ想いだった。いや、叶う事は叶ったが、長くは続かなかった。

恐らくは誰も悪くはなかったのだけど。

「この事は国王陛下には内緒だぞ？　こんな御伽噺を話したと聞いたら、呆れてバカにされるからな」

彼は真剣な顔で、立てた人差し指を唇に当てた。

「わかった。ふたりだけのないしょだね」

額を突き合わせ、二人は共犯者の顔で笑った。

夜の彷徨（後書き）

サブタイトルはZABNADKの同名曲より。洋名が『mermaid』なのです。

御伽噺

長い金の髪はその姿を消し漆黒の短い髪に、マリンプルーの瞳は濃い焦げ茶色へと緩やかに変化する。その華奢な体だけがあまり変化しないのは、術にあまり関与されていないせいだろう。

ねじり上げられた手から短刀が零れ、少女の瞳が驚愕に見開かれる。

「どう……してー？」

「真夜中に寝所まで会いに来て下さるのは光栄の至りですが、…使い慣れぬものを持つと貴女自身が怪我をしますよ？」

どこかからかう様なイエルトの口調に、アデリエルの精神は恐慌状態に陥った。

「いや！ 貴方なんか大嫌いよ！ 放して、放してー！！」

泣き叫びながら暴れる少女を抑え込み、抱き寄せて無理やり唇を重ねる。そのまま深く口づけた。

「ん………っ！」

唇をこじ開けられ、尖った舌が入ってくる。その舌が生き物のように彼女の口腔内を行き来する。

必死に抵抗しようとするが、イエルトの厚い胸はぴくりとも動かない。

「ーん、ん……っ！！」

抗い切れず、背筋を走るぞくりとした震えに体中の力が抜けたとたん、唇が解放される。

どちらからともなく、大きなため息が漏れた。アデリエルの目が大きく潤んでいるのを確認すると、イエルトは満足そうに微笑む。

「これでおあいこだ」

先ほど、眠っている彼に口づけた事を言っているのだろう。つまり、その時点でもう気付いていたと言う事だ。

意地悪く笑うイエルトに、思わずその頬を思いきり平手で打った。あんな力づくの口付けでおあいこだなんて、虫が良すぎる。

「貴方なんか、大っ嫌い、よー」

睨みつける濡れた瞳は勝気な色を残したまま、唇だけが震えていた。

イエルトは殴られた頬をぬぐって、艶然と笑った。

「嫌いで結構。けれど、ここで僕を殺せば両国間の戦争は免れませんか？」

「！」

「貴女に、…もしくは貴女の背後にいる方にどんな思惑があるかは知りませんが、僕を殺す事がお互いの国にとって有益だとは思えない」

「背後になんて、誰もいません！ 私は私の意志で…」

「僕を殺そうと？」

「それは…」

口ごもる少女に、王子はさもおかしげにくすくす笑い出した。

「すみません、冗談ですよ。苛めすぎました。貴女があまりに可愛らしい事ばかり言うので」

その驕慢とも言える態度に、更にアデリエルの頭にカツと血が昇る。自分が愚かなのだと分かってはいたが、溢れ出る怒りの咆哮は止まらなかった。

「だって…！ 貴方には『人魚姫』がいるんでしょう！？ ずっと待って、待って、焦がれた相手が！ だったら何故、あんな嘘を…！」

政略結婚の相手を、かけがえのない人になるだろうと彼は言った。嘘だと思った。あんな目で、あんな狂おしい表情で、彼はいつも海を見ているのに、一度しかあつた事のない他国の娘を大切に思う筈がない。だからきつと、それは王族としての常套句なのだろうと…

「姫は誤解しています」

「口先だけの言葉なんて聞きたくありません」

「貴女が知リたがつていた『人魚姫』は、僕の母ですよ」

「…え？」

予想もしなかつた言葉に、アデルは言葉を失う。

「お母、様…？」

数秒の沈黙が流れた。

「言つたでしよう、昔話だつて」

唇の端で笑いながら、イエルトは彼女の背後に見える夜の海を見つめた。

墨を流したような水面に、波頭だけが新月の光を浴びて白い。

「父が、若くまだ王子だつた頃の事です。祝宴の船で難破して海に投げ出された彼は、遠く海神を祭る島の巫女姫に助けられました。彼らはあつという間に恋におち、王子はそのまま彼女を島から連れ出して妃にした。けれど、土台無理だつたんです」

イエルトの言葉は淡々として淀みない。何の感情も交えず事実だけを語ろうとする姿は、却つて遠い諦念を思わせ、どこか哀しみを伴つていた。

「無理…？」

素直な瞳で問い返す少女に、苦笑を返す。

「思いだけで現実を動かす事はできません。突然連れてこられた娘に周りは戸惑い続け、彼女は慣れぬ土地の慣れぬしきたりにやがて精神を病んだ。何せお互いに無辜の民ではない。王子と異国の巫女姫ですからね。彼女は彼女が愛する王子と同じくらい愛する海に、ずつと引き裂かれ続けたんです。衰弱していく妻の姿に、王子は見かねて彼女を島に返しました」

幼い頃の記憶が去来する。

母を呼んで泣く子供。

あれは三つの時だつたろうか。それとも四つくらいだつたろうか。若い母はまだ二十歳を超えたばかりだつたはずだ。

（かあさま、ぼくをみて。ぼくはここにいろよ、かあさま——！）
美しい母の横顔が思い浮かぶ。彼女の眼に映るのは窓の外、遙か

彼方の海だけであり、幼い息子がそこに映る事はなかった。

父親が抱き上げて、泣き叫ぶ少年を母から引き離した。侍女を叱責する声が響く。

（イエルトを近付けるなと言っただろう！）

今ならあれば、妻と息子の両方を思う、父なりの不器用な思いやりだと分っている。しかし、あの頃は分らなかった。

ただでさえ感受性の強い少年は、己を守るために物語を作り上げる。

（母様は本当は人間じゃない。人魚なんだ。だから、海に帰りたいのも仕方がないんだ）

そう思いながらも、ずっと母親が去った海を見つめて過ごした。

いつかは帰って来てくれるかもしれない、イエルトの事を見て微笑んでくれるかもしれない。有り得ないと知りつつも、美しい母の姿はイエルトの心をとらえたまま、放さなかった。

「幻想ですよ。子供が自分の砂の城を守るために作り上げた、美しいファンタジー。それだけです。だから…貴女が気に病むような事は何一つありません」

「イエルト様…」

王子の語る言葉に、元々聡明な少女は素早く状況を理解する。

「だったら…貴方は初めから分ってらしたのですね。わたくしが『人魚姫』ではないと」

紅い唇から自虐の笑みが零れる。

「…わたくしだって分ってました。王家に生まれた以上、国の為に嫁ぐのは当然だと。これで両国の和平が保たれるなら、相手が誰であろうと何の異論もありませんでした。なのに—」

振り絞る声が涙でかすれる。

「初めて貴方にお会いして…、貴方の噂を聞いた途端、怖くなつてしまった。想い人がいる方に嫁ぐなんて、耐えられるのだろうか。単なる我儘だとは重々承知しています。でも、事実を確かめずにはいられなかった」

己の愚かさに吐き気がしそうだった。これのどこが評判の高い才姫だと言っのだろう。政略結婚の相手に本気で愛されたいと願うなんて、夢見がちな普通の娘となんら変わりないではないか。

俯いて唇を噛み締める目の前の少女に、いとおしさがこみ上げる。確かに彼女のとった行為は王家の一員として愚かしいにもほどがある。しかし -

「僕は、貴女が羨ましい。そんな風にまっすぐ相手を見つめて、思いのたけを振り絞って行動に出る勇氣には素直に敬服します」

「そんな事…！」

彼女の立場では、一歩間違えば最悪の結末をもたらす行為だ。彼の言葉は嫌味としか聞こえない。けれどイエルトは本気だった。

「御伽噺ではいやですか？」

「え…？」

「きつかけが何であれ、世にも美しい王子と姫が出会って、末永く幸福に暮らすと言っのはいけませんか？」

「あ、だって…」

イエルト自身、彼女の行為の愚かさは重々承知だったが、それでも向けられたまなざしに、体中から溢れ出ていた想いに、呼応する何かがなかったと言えは嘘になる。その一途さに、無言の訴えに、いつしか捕われていた。

「少々…マザコンで情けない王子ですが、愚かしくも勇敢で情熱的な姫君に愛されていると自惚れていいのだろうか」

面白そうにじっと覗き込む王子の瞳に、アデルの胸中は怒りと羞恥で荒れ狂う。答えなんか、分かりきっているくせに。

「ひとつだけ、聞かせて下さい」

精一杯の矜持をかき集めて、アデルはずっと気になっていた事を確かめようとした。

「何ですか？」

「あの、いつから…わたくしの正体に気づいてらしたんですか？」

「えーと…」

イエルトは困った様にあらぬ方向を見ながら言葉を濁した。

「割と初めから、かな」

「どうして！」

「海と、私を見る『エリン』の目が、アデリエル姫のそれと同じでした」

ほんのりと照れ隠しの苦笑が混じる。

「割と、勘はいい方なんです」

「じゃあ、なんで…」

即座にその正体を暴こうとしなかったのか。

「貴女の真意が分かりませんでしたし、まずは間諜を使って確証を掴まない…」

山脈を越え、子飼いの密偵を走らせてアデル姫の不在を確認する。その結果が届いたのはつい先日だ。

「全てを分かっているにして、愚かな娘だと…、私を憐れんでいらしたの？」

アデルの正体を知りながら、イエルトは「人魚姫」ごっこに付き合っていたのだ。あの優しい言葉も、抱擁も、全て、彼女だと知りながら。恥ずかしくて消えてしまいたいくらいだ。

けれどあの時、「エリン」に対して彼がくれた言葉や優しさに、一縷の望みを抱いてしまう自分はやはり浅ましいのだろうか。

「…質問はひとつでは終わりそうにないですね」

「イエルト様の真意を…まだお聞きしていないわ」

そう言いながら、不安で顔を背けてしまう自分が悔しい。

彼は、自分のことをどう思っているんだろう。本当に知りたいのは、もうそれだけだった。

「…先ほどの口付けで分かって貰えなのは心外だなあ…」

ぼそりと言うイエルトの言葉に、カツと顔が熱くなった。

「あ、あんな…あれは、だって…」

情熱的という以上に暴力的でさえあった先ほどの口付けに、急に不安が募る。髪の毛一筋ほどの抵抗も許さなかった。そうして、彼

女の内側に熱い塊を送り込んだ。

思った以上に、イエルト王子はしたたかな人間だった。そして…考えたくはないが、思った以上に女性慣れしている気がする。

端正な外見と王子と言う身分を併せ持っているのだから、彼が女性の好意に慣れていても当然かもしれないが、それ以上に年齢不相応に世知長けた感があるのは気のせいだろうか。彼はどこか底が知れない。有り体に言えば、人が悪い。

人が好いだけの無能な王よりは、為政者として決してマイナスではないのだが…果たして自分の手に負える相手だろうか。

残念ながら、彼がしょっちゅう城を抜け出しては港町や獵師町を様々な実地勉強の場としていた事実を、この時点でアデルはもちろん知らない。ただ、元々聡いこの姫は、イエルトが見た目通りの優しいだけの王子でない事に気付かざるを得なかった。

（もしかして…私は早まった事をしたのかしら…）

愚かな振る舞いに走った事は充分自覚しているが、感情に任せて彼の人となりを見誤ってはいないだろうか。

思いだけで現実を変えることはできない、と彼は言った。それは王族として育ったアデルも重々承知している。だから御伽噺のような結末を鵜呑みにすることはできない。できる筈がない。

さりとて彼女が逃げないように重ねられたままの、彼の手の熱さはどうすればいいのだろう。驚？みにされたままの荒れ狂う胸の内は…？

未だ混乱の収まらぬ微かに怯えた目で、アデルはイエルトをそっ
と見上げる。

「真夜中の寝室で、そんな目をされても困るんですが…」

「え？」

「たぶん…あなたが思っている以上に僕は貴女を愛しています。だから覚悟を決めて僕と結婚してください」

前髪が触れるほどの至近距離で、今までにない真顔を見せられて

プロポーズされた。

「え？ あ、はい」

思わず素直に返事をしてしまい、直後、自分の間抜けさに泣きたくなる。

「ずるいわ……」

目を合わせたまままでいるのが耐えられなくて、顔を反らしながら泣きそうな声が漏れた。

「何がですか？」

「だって……その……」

自分でも何が言いたいのがよく分からない。ここは一人になって落ち着いて考えた方がよいかもしれない。

「あの……、とりあえず手を離してください」

「嫌です」

「イエルト様！」

「貴女が浜辺に現れてから……僕がどれだけ自制心を働かせていたかなんて、貴女は知らないでしょう？」

彼はようやく獲物を捕らえた嬉しげな眼で彼女を見つめる。

「え……？」

この様子だと、本当に分っていない。イエルトの苦笑がますます深くなった。

いつの間にか、重ねられた手は彼女の背中に回り、二人の間にあった隙間がなくなってきた。

「じゃあ、教えてあげます」

「ちょ、待つ……！」

言葉は唇によって遮られる。先ほどもずっと濃厚な、けれど焦らす様な甘い口付けが続く。

「ん……ふ……くっ」

胸の奥にある熱い疼きを煽られて、アデルは無意識に彼にしがみ付いていた。

有り得ない自分の中の変化に怖くなって目を瞑っていたら、耳元

で低い声が囁く。耳にかかる吐息がくすぐったくて、逃げようとしたが無駄だった。

「思いだけで現実を変えることは出来ない。でも、思いがあれば何かを変えることは出来ます」

ゆっくり目を開けると、この上なく優しく微笑む彼の瞳がすぐそこにあった。

「だから、僕達はちゃんと一緒に幸せになりましょう」

この城に来てから一生分流したと思った涙が、まだ滲んでくる。幸福で胸が詰まりそうになった。

「――もう、信じられない……」

感情に流されているのかもしれない。

彼との付き合いは一筋縄ではいかないだろう。それでも――

（ずっと、この人のそばにいたい）

寄せては返す波の音が、彼女のささくれた心を癒していく。それ以上に、彼に対する思いがどうしても冷めていかないのが不思議だった。

万感の思いをこめて、自分からキスをする。

イエルトは一瞬戸惑う目をしたが、彼女の細い指に自分のそれを絡めながらゆっくりと彼女を寝台に押し倒す。アデリエルはもう抵抗しなかった。無駄だと分かっていたからだ。

彼に出会ってから、アデルの胸の奥に住んでいた悲しげな人魚が不意に微笑んだ気がしたが、やがてそれも交わされる熱い吐息の向こうへ、遠いさざ波の音と共に消えていった。

その日を境に、拾われた少女の姿を見たものはいなかった。

「もし人魚姫に会いに行くときは、僕も連れてつてくれる？」

「そうだな。考えておこう」

あの日の小さな息子が更にこんな息子を作ったと知ったら、彼女は喜ぶだろうか。

目の前の少年は、母と引き離されたときの息子によく似ていた。父親譲りの茶目っ気のある瞳に、母親譲りの黒髪がよく映えている。遠くで母が呼んでいる声を耳にし、少年は祖父の膝から飛び降りた。

「じゃあね、おじいさま。また来るね」

「ああ。ちゃんと勉強するんだぞ」

「はい」

元氣よく駆け出す孫の姿に、前王は目を細めて送り出す。

自分にできる事はすべてやった。そして王位はとつと息子に譲り渡した。それもこれも、再び彼女に会いに行くためだった。

彼女は自分の為に全てを捨ててついて来てくれた。その結果、多くの辛い思いをさせる事になってしまった。息子と引き離されたのもそのひとつだ。周囲の目は決して温かいものではなく、それ故に彼は必死に努力して王としての揺るぎない地位を作り上げた。しかし、彼女のための努力は、皮肉にも彼女を孤独に追い込む事となってしまった。

最後まで沈黙を守り通し、望郷を叫ばずにいた事が、唯一の彼女の戦い方だったとわかっている。

だから -

国交のためとは言え、花嫁として迎えた隣国の王女はなかなか聡明で覇気に満ちている。あの娘ならあのぼんくら息子ともうまくやっていくだろう。もう充分自分は務めを果たしたのだ。

だから、今度は自分が彼女の元へ行く。それが、彼の長い間心に秘めていた決意だった。

この事を知ったら、あのバカ息子は笑うだろうか。

…まあ、それも構うまい。

（エリン・もうすぐ君の元へ行く）

いつか見た、あの碧い海に。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3896p/>

人魚姫異聞

2011年4月27日14時25分発行